安全の秘訣

020215-000-9

特16-460

安全の秘訣

浅井 元光／訳

M21

ABI-0014

№13155

東京帝國圖書館 TOKIO IMPERIAL LIBRARY

安全の祕訣

○我に聽く者は安全に居らん(箴言一章三十三節)

凡そ危險を忌て、安全を求むるは人の常性なり、されは、顛沛蹉跌の間と雖も、必ず左支右持て、其身を保護することに注意を怠らざるべ、又其性の然らしむる所也と云べし、譬は吾人が市街を歩行るときに際り、奔車逸馬の、其衢に横んとするを見ば、吾人は必ず、其の身に觸れんとするの、危險を知て、安全の地に避ることに猶豫せざるべし、誰れにても危險に出逢ふことを好む者は無き筈なり、故に吾人共に皆危險の、身邊に切迫ることを知るときは、必ず安全ならんことを、熱心に希望せざるもの無し、人家に戸締を設け、鍵及び貫木を用るは、何の爲めなる乎、即ち盜賊を防ぎ、其生命財産を、安全に保護せんと欲すればなり、其他屋梁の避雷柱に於る、大船の艀舟を携帶するが如き、或は落雷、或は破船等の危險

に際、其の生命財産を、保護救助して安全ならしめんと欲すれば也、西洋の俚諺に、ベリースと云一種奇體なる者ありて我國に所謂天狗之類なり渾て人の喜望を充し、併て人を安全に保護するの力を有者ありと云傳へり是は固より、假托空像のことなりと雖も、只に西洋邦國のみに限らず、到る所として、同樣の慣習ありて、或ひは人の調製たる、呪符などに賴りて、災難を免れ、疾病を愈されんとするもの、未開の邦國に於て、其例鮮しとせず、固より痴愚の處爲たることと論ずるを俟たずと雖、是れ即ち人々の、肛裡には安全を希望するの、特性を具ふることを、顯はせりと云べし、吾人は皆此の希望ある故に、若し艱難の、身邊に切迫來り、之れを避くるの力無きことを知るときは、即ち他の力ある者に依り賴で、安全ならんことを望むものなり神は此の思想の、吾人に存在することを知り給ふが故に、吾人が常に安全なるべき法方を、其の慈惠の御

辭によつて、數ケ條示し給ひしなり、神は自ら其人民を守る、城廓壘營なりと云ひ給へり、去れば箴言十八章十節に、エホバの名は高き樓臺の如し、義者は走りて、之ゐ入り救を得とあり、又本題に掲げたる如く、我に聽く者ハ安全に居らんともある也、併し此の誓約は、神に聽く所のものに限りたるをにして、甲乙の差別無きには非ざるなり、吾人は先づ聽くと云ふ意味を、十分探究せざるべからず、蓋は神の言を聽き服膺して、之を其身に實行すると云意味なり、神は已に基督を信じ、其罪を悔改むる樣、吾人を訓へ玉へり、故に吾人の爲すべき事業は、渾て基督を愛することを勉めざる可らず、愛すとは其心に適合ふことなり、果して然らば、吾人は眞正の信徒にして、神に聽とところの者と云べし、抑眞正の信徒は常に安全なる可き筈なり、如何となれば天使吾人の身邊を圍繞エホバの手、克吾人を捧持て守り給へば也、されども信徒たる以

上は決して疾病、災害、死亡、なしと云ふにハ非ず、譬ば兵士が戰場の間に、必ず負傷死亡の患なく、棹師が航海の時に、必ず颶風難船の患ひなしとは限る可らず、只神は、其來るべき災害の、其信徒の爲に適當なる可き限りの、外其身に來るを、許されざる可きなり、されば、吾人が疾病、困難、失望等に因て、其信向を勵まし進むるとの儘あるは、其機會の來るべきときに、吾人に災害の鞭笞を加へて、幾多の感覺を提撕、信向を增加せしめんとの、攝理に出るもの也、譬へば礦山より、掘採たる金礦を見るに金分は閃々として、人目を眩燿し、頗る價直の貴を知ると雖も、未た純精の者には非ず、岩石其他の渣滓多量に混合して居るなり、若し夫を分拆して、純雜を判たんと欲せば、其礦塊を碎破し、岩石渣滓を陶汰、爐火中に投げ入れて烈火を以て鎔解せざる可らず、此の冶金の手續を經るに際し、若し金礦に吾人の如き感覺思想を與へたらんには、

始めに製錬師が、其手に槌を携へ來りて余が愛する金塊よ、余は汝が貴重の價直を妨害る渣滓の、汝の體中に含有するを知るが故に、其混合物を取り去り度思ふなり、併し夫れが爲めに、汝を粉々にして之れを烈火に投ぜざる可からず、されど、之れは最も過酷の法方にして、汝の爲に忍び難きなれども、只此法方の外、汝を純潔にして、通貨及び粧飾器とするに、適當なる法方なければ也、併余ハ最も注意して、汝の一小分子をも失亡せざる樣になすべし、汝烈火の中にあるも必ず安全なるべきなりと、云んに若し彼の金塊にして頑固ならず、且つ製錬師を信用して疑はざれば、歎息歔欷て、或は烈火の艱苦に耐ゆ可からざるを恐れ、或は渣滓の價直を妨ぐるを憂ひ悲愴慷慨遂に決心して、製錬師の云ふ所に從ふ可し、今茲世界にある、神の民は、此の金鑛に均しきものなり、如何となれば神の民は、貴重の眞價を具る內に、無數の罪業を

含有すれゞなり、神が吾人に與へらるゝ困難は乃ち罪惡の渣滓を除き去るべき爲の烈火の如きものにして信徒を清純ならしむるの攝理に出るものゞかし、古來貴重の神民にして、箇樣の攝理に逢遭せしもの、其例鮮少からず譬ば雅各の子、約瑟の如きは未だ小童にして、父の家に居りしときは、恰礦塊の如きものなりしが神は彼をして、貴重の職務に、衝らしむる準備を成さしめ玉ふが爲めに、其兄弟の迫害に因つて、埃及に賣奴となりて、囹圄の裡に幾年月を成すことも無く經過せしめ、其の性質を、鍛錬して純潔ならしめ法羅の朝庭に於て高官たるに堪る、眞價を具へしめ玉へりされど彼れは犴獄土牢の内にあるも尙安全なりしなり、蓋し彼れが渾て艱苦を經歷せしとき我に聽く所のものは、安全にして居らんと云ふ聖語の眞實なるとを頗る記臆したるなるべし、今試みに神に隨ふ人は、如何なるとよりして、安全なるべき

やと問はゞ三の答を要すべし、先第一に、惡魔の誘惑を免れて、安全なる可きこと是れなり、聖書にサタンは惡魔の頭立たる者にして、吼る獅子の如く經廻て、呑む可き者を尋ぬとあり、惡鬼は常に人を罪に誘き、人を亡す爲め、經廻りて居るものなり、善良なる天の使が吾人の眼に遮らざる如く、惡鬼も亦た吾人の目に遮らざる故に、彼れが人類を滅亡の道に、誘惑するの法方は、聖書之れが証明を爲すに非らざれは知る能はざりーならん、今聖書を繙いて之れを見れば、惡鬼が神を信ずる者を害せんとするの法方、及び神が之れを守り防ぎ玉ふ法方等の實例を細かに説示せり、約百は善良篤實の人なりし故に、神は約百を指して神を恐れ惡に遠ざかりし世界無比の義人なりと賞し玉へり、彼れは其資産頗る富饒にして、剩へ七人の男子と、三人の女子とを有てり、今世の人は、其の資産を算るに多く金銀の多寡を以てすされど約百

の頃は、其人に附屬せる所の、家畜の數を算へて其富を知れり、故に聖書に、約百の富と記して、羊七千匹、駱駝三千匹、牛五千匹、驢馬五百匹を、所有とありて其國無比の富豪家と稱せられ、彼れの一舉一動ハ、渾て人の注目を來たし、貴賤の別なく彼れを敬慕したるや疑なし、實に彼は瞽者の爲めには眼となり跛者の爲めには足となり、苦める者を助け、救ひ、孤寡の心に慰を與へ、貧者の爲めに父となれり、渾ての人の祝福は皆な彼れに歸せよと願ひしならん、此の善良篤實なる約百、其の人は眞に愛敬すべき性質を具へたる者と云べし、然るにサタン彼れを試みたり、蓋は神が諸の天使に對ひ、萬邦の人類中、約百の如き善良篤實なる義人は復有ることと無しと云はれければ、サタンモ、亦其席にありて、云けるは汝常に彼れの生命財産を保護し、無量の恩惠を與へ、幸福に充つるを以て、其の益を得るに因つて汝を恐れ、篤實者の假面を粧ふ

ならん、犬の主人を愛するは、其の食を愛するのみ、約百の如きも之れに庶幾、今若し試みに彼れの幸福を杜絶、余をして彼れの財産を奪はしめば、彼れハ直ちに汝に叛き、必ず汝を罵るべしと、爾も巧みに讒しけり、其の時神はサタンをして百約を試むることを許し給ひしかど、一群の賊黨の手に因りて多數の牛を盜ませ、電雷の力に因りて、其の羊を打ち亡ぼし、ガラテヤの軍勢を驅つて、駱駝を掠めーめたり、其時十人の子女は、皆な長兄の饗應に招かれ笑ひ樂み飲食し餘念もなくて居たりしにサタンは非常の暴風を起し、其の家屋を、瞬間に顚覆して十人共に只一打に同じ筵に屍を駢べて、最無墓も死失せたり、渾て此の禍は皆同日に興りしなり、一人の僕が、急遽倉皇、牛と驢馬を失ひ、其の顚末を告ぐるや、否又引續ひて他の僕が羊と駱駝を失ひしをを告げたり、是等を聞ける約百の喫驚、兎角の言語も出でざるに、霹靂一聲、百

千の電雷よりも恐るべき、耳を貫く音信を、最後に告ぐる者ありけり、乃ち十人の子供等の皆な悉く死せし事なり、約百が悲歎の哀情は、燒野の雉子、夜の鶴凡う生とし生ける者に、子を愛まぬ者はなく、況てや之れは十人の愛子を一時に失ひし、哀別離苦の憂に沉みて、又白日を仰ぐの望、心の裡に絶へ果てたるべし、此の時約百はサタンの前言に違はず、教を棄てゝ神を罵りし乎、否、彼れは起つて、其の外套を裂き、髪を薙（是等のことは其時代に深き哀を顯はすに人々お爲せし例なり）地に俯伏し拜して云ひけるは、ヱホバ之を與へて而て、ヱホバ之を取れり、ヱホバの名は祝すべきなりと、如此ありしかば、神ハ復たサタンに向ひ玉て、汝今日約百に就て、如何に思ふやと尋ね玉ひければ、サタンは未だ飽たらず彼れは健康なるが故、其財産子女の失亡を、心に介意思はぬならん、若し又彼れに病を與へて、其健全を妨げなば、必ず怒りて汝を咀んとぞ讒しける神復び約百

を試むるとゝ許し玉ひければサタンは約百の頭より其の踵に至るまで、數多の腫物を發せしめ、全身怡癘人に均膿潰て痛に耐へず身に漆せし故典も、よも如此までにはあらざる可し、約百は其の身を置く所なく、自から灰の中に坐し瓦片を以て其身を搔きつゝ云けるは、我曾て祥を神より受く、今豈神に賴つて禍をも受けざる可んやと、約百長く、苦難の竈中に置れけれど辛苦の餘火は彼を傷ず、只彼の渣滓を燒き盡して、純精清淨のものとなせしなりされば讚美歌にも、彼ハ金の如く淨められしとありて、常に安全なりしなり、約百は其試驗の中にありて、尙、吾れは金の如く脫出んと云たりしが、果して神は凡て彼れの困難を掃ひ、健康に復し再ひ十人の子女を與へ牛羊駱駝驢馬の如きも皆な悉く二倍して與へられしとあり、約百はサタンの讒に遭ひて、又一層の信德を增し、富有も昔時に加倍して、永遠無窮の幸福を、神の御

國に保つを得たり、サタンは約百の益友なるが、如き結果を遂ひに生ぜしなり、聖書に、神の攝理は、渾て其の招きに因つて、神を愛するものゝ爲めに、悉く働きて、益を成せりとあり、約百の試は、只に彼れ一身の經驗のみにあらず、渾ての信徒の摸範となれり、此の摸範は、其時より今日まで教會に存在せり、若約百にして、此鍛錬を經ざりしならば、吾人は如何にして、サタンなる者は神の攝理の下にありて、自ら擅にするの權力無をを知る克はざる可しサタンは驚くべき力を有りと雖も鎖ふ維れたる獅子の如き者なりサタンは固より、約百を全く亡ぼすをを熱望せりと雖、神の許しを經ざる以上は、其頭髮の一縷をも喪ふを克はず神に許されしをの外、分厘の害をも、余分に加るを克はず、約百は全く安全なり、サタンは、今も神れ許を俟たずして信徒を害するを克はずされど吾人共に、神に聽き神の民たる以上は彼も亦如何共する

克はざるべし、されば、讃美歌にも信向の最薄き信徒と雖も、祈りの爲めに跪けば、サタン之れを見て恐慄とあり、之れ信徒は神の保護によりて、惡魔の誘惑を免れて安全なるべき實例なり又第二なる惡人の迫害より、免れて身を安全の地に置くをを得し一つの實例を示さんとす、數年前に、或る宣教師が、英國より米國の、西印度と云所に住居奴隷に道を傳る爲め、航海せしに、大洋の中央に至りし頃、此の舟を目懸け來る、海賊船あり、宣教師が乘りし船は、ブリタニヤ號と云ひしが、船長は海賊船の襲ひ來るを見て、備を立て、水夫を整列して、十分の防を成んと決心せしが、彼是れ混雜の間に彼の傳道者は、神に祈りを捧る爲め、船中の一室に入りたりき、彼の傳道者の心にては、箇樣なる危急の場合には、神に祈るより外、好手段は無しと思へり、兎角する内、彼の海賊は其舟を漕近付るや否、鐵炮を打懸け、或ひは鐵搭を長繩に結付て

舟に投掛け乗移らんとなしけるにゞ、船長は迚も箇様な大敵の襲來を無難に免る可からざるを知り、心に十分の鬼胎を懷き、必死の覺悟に防戰せしが、其の船中の一室に、彼の傳道者の懇なる祈りは、如何なる力ある救助者なりしやを知らざりしが、鉦聲は海面に轟き、炮烟四方を包んで其雜鬧云ん方なく、海賊は彼の鐵搭を船へ、投掛けんとせしが、其船傾きて鐵搭を持ちたるものは忽ち海に落入りたり、海賊は再三箇樣に試みたれども、誰れも海に落入しかば、彼等は心を急劇て、ブリタニヤ號を擊沉めんと、無數に炮發なしたりしが、覘ハ外て海に落ち的中せしは無りしとゞ、餘りに劇しく炮發せゝ故、炮烟四方に簇り立ちて、彼我の間を遮り包み、目指ブリタニヤ號の居所も分ぬ迄になりければ賊も目的を失ひて、只茫然たる計りなりしが、暫らくありて一陣の風吹出でゝ、今迄も賊の船をば取圍める烟を颯と吹拂へば、是は麼

生如何、ブリタニヤ號は順風に眞帆打張り、遙彼方の海上を、矢を射る如く走り行き、又追迫らん樣もなく、賊は望を絶ちたりしとゞ、夫れより凡そ五年を經て、彼の傳道者は、不慮も彼海賊の船長に西印度にて、逢たりしが、此の時彼れは海賊の惡き渡世を改めて、基督信者となり居たり、彼れが信者となりたるは、不思議の機會に、ブリタニヤ號が賊難を免れしをに因て、始て自分の惡業に非常の感動を發起心を改め、神に事へ、最幸福なる者となれりと、彼の傳道者に談りしとゞ、又數年前のをなりとか蘇格蘭に於て、新教信徒は、天主教徒の爲めに、非常の迫害を受け國律を以て新教徒の集會を禁じ、若し命令に背く者あれば囚へて獄に下だし、兵隊を派遣して犯命者を拿捕しめんとして絶にず、巡行せしめたり、或時新教派の數人が、嶮しき谿間に集合て、神禮拜したりしに集りの央に、一隊の兵卒、山を越えて、其所を通り過ぎんとする

を見て、集れる人々は大ひに驚き、逃れ避けんも一條路、前に斷岸絶壁ありて、翼なくては翔るべくもあらず、後へは峨々たる崇巒にて猢猿ならでは攀るに由なし、進退茲に極りて、又詮方も無ものから、只一心に祈りを成し、神の救助を仰ぎつゝ、突見れば、今迄山腰を僅かに纏へる淺霧は、次第々々に糢糊として、一處に凝り重なり、彼の集れる人々の周圍を蔽ひ匿せしかば、隊伍をなして錬り來りし、彼の兵卒の同勢は、其數凡う一町計り、連續しつゝ錬り來りしが其内一人も、集れる人を見出す克はざりしは、單に神の御保護に賴れる一つの實例なるべし、又數年前に英國に、ローランドヒルと云る、有名の傳道者ありけるが、年頃雇ひ置ける園丁が近隣の者の物品を盗めりと云ふ、罪の確証を見咎められたりし故、法庭に引出されて、審判の末遂に死刑に處せらるゝことに決定せり、勿論、ローランドヒル氏は、彼が獄中に維しより折々

彼れを訪問したりしに、或時同氏に對し、是れ迄の犯罪を落ち無く首實なーければ、同氏は彼に向、汝是迄左迄に盗を心懸けながら何吾ものを一回も盗まざりしやと問けるに彼答へて、下拙屢くゝ其折を窺たれ共、遂に其機會を得ざりしが、就中某日彼の食堂の窓に、程近庭木の中に身を寄せて忍入んと覗しに、内に何やら耳語聲して、忍入るべき機會なく此の聲は同氏の神に祈一度も盗み得ざりしなり、加之教會中に善良家の好評ある老人、ルウッキ氏は、富有の聞あるを以て、或日同氏の構中に忍び入り、籬の傍に身を密、機會を覗ひ居たりしに、生憎同氏が近傍の祈會から歸られて、忍べる下拙の傍を通られたれば、其事も遂に果さず止みたりき、下拙は常に彼の人の良善なるを知る故に、彼の人が傍へに參らるゝことなどあるときは覺へず戰慄れて頓に盗みの心を挫き惡しき念を止たりと云り、茲の數人ころ眞實にエホバに聽

し所の者にて、乃ち惡人より安全に守られしものと云べし」エホバの守りは夫のみならず、有とあらゆる危難より、安全無事に免る丶爲め、彼れに眞實聞くところの者を必ず惠み玉はるべし、ノアは世の不信仰なる人々を亡さんとて降されし大洪水の其時は實に危艱なるをなりしが、水が地上に溢れて居る、其の間には箱船の内に安全なりしなり、又彼の恐るべき廣漠の荒地を多年彷徨、以色列の人民は、實に危難なることなりしが、四十餘年の長の旅行を安全無事に、迦南なる吾故郷に返りたり、又ダニエルが獅子の穴に投入られ、ダニエルの三人の友は、火爐の内に投入られしは、誰れも危險のをなりしが、猛き獸に噬み傷られず、熱き火爐に、一筋の毛髮をさへ焦されざりしは、神の守りの著しく驚き思ふ奇蹟ならず、や、神の守りは、今昔の變りなく彼れに聽ける所のものに及ぶべき、近來有りし實例を今又茲に掲ぐれば、數年以前

に亞米利加の北東の或洲にエリヤボリノと云ふ人ありしが是は亞米利加の聖書會社を建てたる人なり彼れが未だ或る町會所に勸めて居りしときなりし、其頃連日の强雨にて、道路も川と變るまで、出水しけるが夜に入りて、同氏は遲く家に歸れり、然るに平常通行の橋板が出水の爲めに推流されしを、同氏は更に知らずして、馬車に乘りつ丶、歸り來れり、彼れの友人彼れに向つて問けるは、今日は何處の道より歸られしや、彼答へて勿論常の道なりと、されど友人は之れを信ぜず已に彼處の橋板は、出水の爲めに推流されて、往來のならぬ筈なりと、訝りければ、同氏固より其事を少しも知らざるのみならず、慥かに橋を通りしことを記臆せし故、共に不審り、翌朝に至り、諸共に彼處に赴きて、其形況を見てあれば、果して橋板は流出し、只兩側と中央に、懸け渡したる三本の梁木のみ餘りて在り、其兩側の最隘、梁木の上に、車輪の痕

跡判然としてありければ始めて事の本末を推し測りつゝ驚くのみ、馬も乗人も往く路は、闇夜の爲めに見へ分ねど、馬は中央の梁木を通り、車の兩輪は双方の梁木の上を輾りつゝ、無難に其橋を渡り了るまで、右と左に分厘も片寄らぬ樣守られしは最とも不思議のことなりき、眞の神は昔し其信者を渾ての害惡より安全ならしめ給ひし如く今も亦如此なし給へり、昔猶太國に饑饉ありしとき、神ハ豫言者以利亞に烏を以て、食物を運ばせ給へる神蹟を聞きて、驚く所なるが、神は今尙其の如き法方を以て、其信者を救ひ給ひしことのあり、數年前にフランス國に有名なる、セントパートルマイと云ふ祭日に最恐るべき濫殺あり、新教の徒數千人を三日間に殺戮せしが、新教派の教師にて、コリニーと云人は國王の命令を以て其の自宅にて殺害せられたり此のコリニーに屬て居りし、メリンと云フ教師は、如何にもして茲迫害を

逃んものと思案を廻らし、枯草の積蓄へある其内に潜みて居しが、食物を求むるに由縁なく、若し他に出て人の眼に觸るをなどありもせば、忽ち捕へらるゝならんと、餓を忍びて居たりしが、豫言者以利亞に烏を以つて、食を送らせ玉ひたる神は、今亦此人に牝鷄をこう遣し玉へり、此鷄、毎日枯草の側に來りて、卵を生み一日も怠ることなければ、メリンは、夫れを取食ひて辛くも命を維ぎつゝ、此危難をぞ免るゝことを得たりと云ふ、神は信者を守る爲めに尤も小さき最下等の者を用ひ玉へるをあり、或國に善良なる君主ありしが、殿閣に無數の蠅の居るに困却せられ、又其蠅を捕へんとて、蛛が巣を張るを見て憤りに耐えず、嗚呼神は何の爲めに、蠅と蛛を創造玉ひしかと、其心に十分神の攝理を疑ひたりしに、其後敵國と劇戰の時、不慮も敗北して從卒兵士も、四方に散じ、附添ふ一人の味方もなく、風の音だに心置く、落人の身と成

りつゝも、森林中を彼首我首と彷徨て、大ひに疲を覺へしかば、芝生の上に横はり、暫し勞れを息めんと、臥せしに覺へず、熟睡して前後も知らぬ高鼾、折しも一人の敵卒が此の近傍を經過、此の況狀を一ト目見て、打頷きつゝ、右の手に白刃取り持ち、忍び寄り、あはや、刺さんと身搆せし此時遲く、彼時早し、何方よりか飛び來りけん一匹の蠅、彼の君の耳を多叢たりしにぞ、假寐の夢は頓に覺め、突見ば前に刺客あり、危難其身に切迫せしに、何でか猶豫し居らるべき、忽ち佩劍拔翳し、只一刀に兵卒を二段として其所を去り、其の夜は同じ森の中の洞に其身を潜めしに、彼の君洞に入るや、否一疋の蛛舞下りて、其入口に巣を張りたり、敵卒二人敗將を尋るために此の森を通り懸りて、洞穴に注目つゝ、一人の云やう、彼の敗將は若しも此の洞穴の中に匿れしやも知れず、先づ其中を改め見んと、立寄らんとするを一人が引留め、否、夫れは甚だ無

益なるべし、汝は未だ彼の入口に張りたる蛛の巣を見ずや、若し彼の内に、彼の人が入らんとならば、蛛巣を敗らずしては立ち入る可らず、無益の洞穴詮索達して、蜂に禿顱を刺れやせん、止乎哉々々と對反に戯言交りの高調子、笑どよめき行き過ぎけり、彼れらが通り過し後、君は地上に跪き、神が蠅と蛛とを以て其命を救ひ玉ひしをを感謝し、曾て神の御擇理を疑ひたりし、其罪を只管悔悟なしたりしとぞ、又當時エルサレムに居る所の、英國の監督師、ゴビヤトと云人あり、數年間レバノン山のダヅースと云ふ野蠻人民や又スリヤ地方の最も猛惡なる、人民の内に多年傳道せしをありしが、非常に艱苦を嘗め、又度々危險なるをに逢遭しをありて、爲めに落膽失望し、過ぎ越し方や、行末を思ひ續けて、兎や角に其好結果なきを憂ひ、甚だ悲歎に沉みしが、忽ち心を取り直し、祈りを成んと、其場所を見廻す、彼方の山側に、洞穴あるを

見認しかば、是は屈竟と内に入、尙奥深く進み行き、跪きつゝ懇に己れの落膽失望の、其本末を謂顯し、心に勇氣と慰を得させ玉へと、只管祈りありて頭を擡げ始て暗穴の中を風と見廻せば、傍への隅に烱然たる四點の火光を見出したり、之れハ不思議と眼を認めて、倘克く見れば、其光りは彼國にてハヒナと呼る、猛獸二匹此の穴に棲みてありし、眼の光りの爛々たるにてありしなり、監督師は此猛獸の穴に入り直傍らに跪きて數十分時間、諸共に居れ共、神は其の獸の口を閉て、彼れを害するをを免さず、此の不思議なる奇蹟を見て心大ひに勇み勵み心の内に思るやう、彼の猛獸と諸共に一ッの穴にありながら、夫すら守りて安全に居らしめ玉ふ我神は、渾ての危難險難より救ひ玉はぬ筈はなしと、夫れより一層熱心に、道を傳へて倦まざりーとぞ、我れに聞く所ろの者は、安全に居らしめんとの事實には尤適せる奇談なるべし、又

この監督師に就ひて、一の奇談あり、之れも亦ハヒナが彼れを救ひしをなり、此事は、彼れが此國に傳道して居りしときのをにして、其地の酋長より敎に就ひて質問を成度ものあるなれど、來臨あれとの招待なり、是は傳道者には好音信にて、心の内に悅びつゝ、二三日中に、必ず參るべき由の、答をこうは成したりしが、折惡敷二竪に犯されて心ならずも行を叶はず、兎や角成す内又一層手厚い招きを受たりければ、心を決して使に向ひ、明日必ず發途すべしとて、其使をば留置きつゝ旅仕度をこうしたりしに豫てマルタへ傳道せんとて、便船を賴み置し、其船が明日正午に出帆するとて、爲報知の書束が到來せり、監督師は如何にせんと躊躇しが使の者の云ける樣若しも是より直に出發せば、今宵夜半に吾主人方まで參るを得べし、然して主人と御談話あるも明朝早く御歸舘あらば必ず出帆に間に合べしと云ふに任せて出發に

心を決し、其使は外にツーズの同行人、兩三人と諸共に、此の地を出でゝ、行く先は八里絶し、山又山、九折なる崖路を、たどりたどりて行程に、秋の日足の最はやく、はや西山に傾きて木の下蔭の薄暗き、道に迷ひて彼首此首と、經巡りつゝ、稍本道に出る頃い、一二時間を費したれば、日は十分に暮れ果てゝ、暗さは味らし、行先に心置かるゝ、嶮岨路たどり兼つゝありければ、皆な立止まりて進み得ずされども彼れは其心彼酋長の神に向ふ、其の熱心の冷却せぬ内に基督を傳へんと思ふ望の切なれば、獨り進んで尙止まず、渾てを神に委任して進み玉へと同行を勵すものから彼れも亦疲れを忍び杖を曳き、歩行始る程もなく廿日の月は山の端を出でゝ隈なく、行先を照らすに一同便利を得て、隘く嶮しき崖添の一條路を、事ともせず進み行つゝ、何氣なく遙か先方を打見やれば往先の路の、中央に犢ふ等しき、一匹のハイナが横に臥し

て居れり、同行の人之れを見て、大に驚き、石を取り投げ付ければハイナは怒り、飛揚りて其の往先へ走り往き形は見へず成りけれどもツーズ人の諺にハイナの經過し其道は不祥なりと云をあれば、彼等は是れより一歩も進まず、監督師は只管に歩行しめんと勸むれど、緣起に凝りし無智の俗、只一轍に諺を堅く守りて、動す可からず、彼使の者も持て餘し、監督師に勸むる樣、今宵は已に夜も更たれば此隣村に一泊せられ、明朝未明に立ち出でなば、主人と共に御談話の猶豫も一二時間はあるべしと云へるに同意し、其村に遂に一泊したりしに旅行の疲れに覺へずも、皆睡過て朝晩く起き出たれば、監督師は彼の酋長許至るの遑なく、自家の望に逆ひて、又の餘日を約しつゝ、元來し道へ取つて歸し急ひで海岸に來て見れば、未だ便船は出帆せず、乘込切符を買求むべき猶豫さへ十分ありければ直に其れに乘込でマルタに至り

て、傳道の勤務に餘念なきものから、彼の酋長の事はしも忘るゝとにはあらねども、其儘にして打過ぎしが、さるにても彼日早酋長の居村に近き、狽の爲めに道を過ぎり妨げられしは、如何にも不思議のことなりけりと、悟りかねつゝありけるに、或日レパノンに居る友人より、書束到來なしたりしを、開きて見れば、思ひきや彼の酋長は、基督を信ずる望無き而已か、其質猛惡兇暴して、彼の日傳道者を誘ひ寄せ、謀つて殺さんとの企なりしと云へるを聞ける、監督師は、始めて事の由を悟り彼の日のことを思ひ出で、惡しき人の企より無事安全に守り玉ひし、惠みを只管感謝せしとゞ、夫れに引替へ、酋長は豫て匠みし、陰謀の不思議に齟齬せしことを聞き、彼の傳道者は、之れ實に神の僕なりと云ひて己れの惡心を繇へし救主を信じて無二の信友となりけるとぞ、我に聞く所のものは、安全に居らんとの、神の辭は眞實なりき凡う神の民たる

者は、或ひは惡魔の誘惑より、或ひは惡人の企てより、或ひは渾ての害惡より、皆安全ならしめ玉はん、就中に肝要なるは、眞の安全の基なり、若吾人が常に安全を願ふものは、宜しくイエスを愛し、而してイエスを吾人の友と成さゞるべからず、さらば、彼れに聽くものは、安全に居らるべきなり、詩篇に如此句あり、以て証とす

汝曹、聖者よ彼れを畏よ、さらば、外に畏るゝを非らざるべし、喜んで彼れに事へ、汝の家計を、彼れの手の内にあらめしよ

彼れ必ず、其恩を灑がんと

又茲に、同旨意なる、麗はしき讃美歌あり、援引て以て証とすべし

基督の力を知る者は、番兵、或ひは武器を要せず、汝が勉むるに際りては、熱土氷山の中を過も、其身安全ならん、如何なる變化あるも、彼れの有する憂は、我を惠み且つ救べし、我は東西に漂流するも尙我は彼と共にあらんと、亞孟、

明治廿一年十一月五日印刷
明治廿一年十一月八日出版

東京府士族
飜譯兼發行者　淺井元光
小石川區小日向臺町一丁目五番地

印刷者　廣瀨安七
東京日本橋區兜町壹番地製紙分社